

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 定松 淳

環境問題における科学的側面と社会的側面の複雑な相互浸透関係は、従来社会学において著しく研究が手薄であった。すなわち、社会問題の中に科学的問題が、あるいは科学的問題の中に社会問題の側面が多重的に入り込む入れ子型の複合状態に立ち入った本格的な記述、分析は環境社会学でも科学社会学でも久しく空白の状態が続いてきた。

本論文は、所沢ダイオキシン問題に関与する学セクター、民セクター、官セクターの認識とふるまいに関する丹念かつ系統的な記述、分析を行うことによってこのような研究の空白を埋める試みである。1章では、1995年から1999年にかけて所沢で社会問題化したダイオキシン問題の展開を7つの相に分解して記述しつつ、本研究の意義が明示される。2章で、本論文が環境社会学、科学社会学の先行研究と比べていかなる特徴を備えているかに触れ、科学社会学のセクターモデルに立脚して分析枠組を措定し、その学術的な意義を特定する。3章では、所沢周辺の廃棄物焼却問題をめぐる運動が、同地域のダイオキシン測定を科学者に依頼するまでの社会過程を精査し、同一問題に向き合う民セクターと学セクターの認識のずれと重なりを分析する。4章で、ほぼ同時期にスタートした官セクターのダイオキシン対策に注目し、厚生省と環境庁の規制政策、規制目標数値の比較分析をとおして、全体として規制体系が民セクターの当事者の問題にどの部分で届き、どの部分で届きえていないかを特定する。5章で、所沢周辺の地域環境運動としてスタートした民セクターの運動が県に対する公害調停運動へと拡大する過程を精査し、民セクターが当初のダイオキシン問題から離れることの意味を解明する。6章で、ダイオキシン類対策特別措置法施行以降、民セクターが行政訴訟へと運動の力点を移行する過程を分析し、官セクターによる問題解決の切り札と目されてきた同法が民セクターにとってもちえた意味と限界を特定する。7章では、ダイオキシン問題に関与する学セクター、民セクター、官セクターの分析を総合すると、科学的側面と社会的側面にどのような複合関係が浮き彫りになるかをまとめ、既存の政策軌道に由来する制約の所在を指摘する。8章では、論文全体の結論をまとめ、社会学的にどのような構造的な問題と政策の盲点が存在し、それらが今後どのような新たな課題につながるかを展望する。

本論文の独創性は、環境社会学、科学社会学で暗黙に想定されてきた科学と社会の二分法的な枠組みを乗り越える探究の地平を、学、民、官セクターの問題認識の重なりとずれ、さらに問題の科学的側面と社会的側面の入れ子型の相互浸透構造に立ち入った周到な分析をふまえて示した点にある。産セクターに関して叙述の余地を今後に残しているものの、環境社会学でも科学社会学でも研究の盲点となってきた広い意味での規制科学の位置と限界を学、民、官セクターの相互関係をとおして周到に解明した学術的価値はきわめて大きい。以上により、本審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するにふさわしい水準に達していると判断する。